

京都文教大学人間学研究所共同研究プロジェクト
「地域と結ぶ癒しの技の研究開発」主催

レクチャーコンサート&シンポジウム
「人と音－音からみえる生活、身体、環境」

日時：2014年2月11日（火）14：00－16：00

会場：京都市男女共同参画センター

ウイングス京都・イベントホール

<シンポジスト>

- 松本 公博（カテリーナ古楽器研究所 所長）
安本 義正（京都文教短期大学 学長）
馬場 雄司（京都文教大学総合社会学部 教授）
濱野 清志（京都文教大学臨床心理学部 教授）
永澤 哲（京都文教大学総合社会学部 准教授）
<司 会>馬場 雄司



解題：馬場雄司（京都文教大学総合社会学部教授）

2014年2月11日ウイングス京都において、大分県杵築市山香町のカテリーナ古楽器研究所（松本公博所長）のカテリーナファミリーを招き、「音の力」という総合タイトルのもと、レクチャーコンサート「昔の音世界」とシンポジウム「人と音－音からみえる生活、身体、環境」を開催した。

カテリーナ古楽器研究所を主宰する松本公博氏は、国立音楽大学で調律やチェンバロ製作を学んだあと、1971年、東京都福生に同研究所を開設し、ヨーロッパ中世・ルネサンス時代の古楽器や竹製のオリジナル楽器製作にとりくんできた。1991年に現在の大分山香町の古民家に拠点を移し、森や竹林の手入れをしつつ、有機栽培の稲作・畑作を中心とする循環型生活を営みながら、古楽器や竹楽器の研究・製

作、自作楽器を使ったレクチャーコンサート、楽器作りのワークショップなどの活動を展開している。「地域と結ぶ癒しの技の研究開発」プロジェクトのメンバーである馬場の担当する実践人類学実習では、毎年9月にこのカテリーナ古楽器研究所に約1週間滞在し、農業体験を含めた自然の中での生活を体験し、竹を自分たちで切り出して楽器の製作を行い、アンサンブルの練習を行っている。

今回のレクチャーコンサートでは、松本公博・照夫妻及び未来（長男）、舞香（長女）からなるカテリーナファミリーコンサートに、パーカッション田中良太氏を加え、ヨーロッパ中世及びルネサンス期の楽曲の演奏が披露された（P.66のプログラム参照）。これらの曲は、戦国時代に日本にも伝わり、京都でも鳴り響いていた可能性もあるとされ、ヨーロッパの昔の音であるとともに、日本の昔の音でもあり、日本とヨーロッパの交流の歴史を感じさせる音世界ともいえる。カテリーナ古楽器研究所では、便利になりすぎた現代だからこそ、手作りの楽器の音を通じて、手作りのもので生活していた時代の不便だが豊かな感性の世界を思い起こすことの重要性を強調してきたが、こ

のコンサートでは特にその点が意識されていた。コンサートのあと、松本公博氏によるフィリピンの山岳民族カリングの竹楽器バリンビンなど手作り竹楽器の紹介が実演とともになされ、同じくアジアの竹楽器であるアイヌの口琴ムックリの演奏が特別ゲストの長根あきさんによって行われた。

このレクチャーコンサートののち、京都文教大学総合社会学部3年生5名（馬場実践人類学ゼミ生）によるカテリーナ古楽器研究所でのワークショップ体験報告が行われた。ここでは、宇治において「音」と人や自然または地域との関係性を考察するために作成したサウンドマップの紹介とともに、カテリーナ古楽器研究所でのワークショップでの体験が語られた。そこでは、竹を自ら切り出しトガトンなどの竹楽器を製作する他、自然の中を散策しながら音に耳を傾ける「森のサウンドウォーク」を行い、自然にはさまざまな音が充満していることに気づくと同時に、都市空間では音に対する感覚が鈍り、必要でない音は自然に聞かないようにしていることに気づいたことなどが語られた。また、カテリーナでの自然を生かした手作りの生活を体験する中で、昔のような自然の中の生活では、不便だからこそ五感をフルに活用する必要があり、感受性が豊かになることに気づき、不便を体験することの重要さが示された。現代の生活は便利さ故に心に渴望感があること、自然に接し不便を感じることで心に余裕ができることも指摘された。そして、自ら製作したトガトンが紹介された。トガトンはフィリピン山岳民族カリングの楽器として知られ、異なる長さに切りとった複数の竹筒を、丸太など堅いものに打ち付けて音を出す。短いものほど高い音が出るので音階を作ることができ、ハンドベルのように一人二本ずつ持ってアンサンブルを行うことができる。参加者が増えると曲に深みができ音にも迫力が出て、演奏のパリエーションが豊かになるばかりでなく、楽器から森の音、大地の音など自然の音を感じることができると指摘された。そして、こうした経験を経ることで、日常生活の中で様々な音を感じる感性が養われたとの感想が語られた。

第二部のシンポジウム「人と音—音からみえる生活、身体、環境」は、以上のレクチャーコンサートと、学生による体験報告を踏まえて行われた。話題提供者は、馬場雄司（京都文教大学総合社会学部）、濱野清志（京都文教大学臨床心理学部）、永澤哲（京都文教大学総合社会学部）、安本義正（京都文教短期大学）、松本公博（カテリーナ古楽器研究所）の5名であり、馬場が司会進行を務めた。以下は、その記録である。

馬場：学生たちは一週間のカテリーナでの合宿を通じまして、自然の中での様々な音の体験をしたのですが、合宿に行く前には耳に入ってこなかった自然の音が、合宿から帰ってきて聞こえるようになった、そのような意見が聞かれました。

それでは、ディスカッションに入りたいと思います。最初に「昔の音世界」というタイトルでカテリーナの皆さんに登場していただいたのですが、昔の音をイメージしながら聞いてくださいと松本公博さんがおっしゃっていらっしゃるように、「昔はこんな音が流れていたな」というような、昔の生活にも思いをはせながら、レクチャーコンサートという形で演奏していただきました。そして今日のゲストの長根さんのすばらしいムックリの音。それから学生たちが体験した不便な生活をして感性を取り戻すという

話、そんな前半の話を踏まえまして、後半のディスカッションに入ろうかと思います。一応チラシの方にお名前を載せさせていただきました京都文教の先生方を紹介させていただきたいと思います。

まず、京都文教短期大学の学長でいらっしゃいます安本義正先生です。

安本：よろしくお願ひします。（拍手）

馬場：安本先生、ご専門は？

安本：一応音響工学ということですが、散歩をしたり米を作ったり、何をやっているかわからないという雑学が専門です。

馬場：文教大学に行きますと、日本庭園がありまして、そこに水琴窟があるのですけれども、その設置を企画提案された方のございまして、もし、行かれるようなことがありましたら、是非、音に耳を傾けていただければと思います。

それから臨床心理学部の濱野清志先生、ご専門は臨床心理学なのですが、気功の実践家として活躍されておられます。ここにも先生の気功教室に通ってらっしゃる方もいらっしゃると思います。(拍手)

それから総合社会学部の永澤哲先生です。実はチベット人で(笑)、ブータン人がチベット人かわからないくらい、そちらの方が長いのではないかという噂もありますが、チベット仏教がご専門で、『瞑想と脳科学』という著書が出版されていて、最近、音と身体の関係が脳科学的に考えていらっしゃると思います。(拍手)

私は東南アジアのタイのあたりの研究をしている文化人類学者なのですが、タイの文化とか、アジアの手作り楽器、民族音楽の研究をし、タイの楽器の演奏などもしております。それではまず、松本公博さんのコンサート「昔の音世界」の、特に演奏に対して、いろんな角度から質問するという形で進めていきたいと思います。まず、先ほど学生たちが、カテリーナでいろいろな体験をしたという話をしましたが、松本さんには、毎年お世話になっているのですが、どうでしょうか、学生たちの受け入れに関して、何かお感じになったことはありますか？

松本：もう学生さんを受け入れているのは7回目になります。毎年人数も違うのですが、私が一番学生さんたちに持って帰ってもらいたいものがあるのです。それは気力、やる気。何でそういうかという、五感、今の人たちは五感をあまり使わなくなっていると思うのです。味覚や聴覚や視覚や、誰もかれも、もうiPhoneやってですね、五感が全くなくなっちゃったのです。学生さんたちは、初日、中山香の駅からうちまで20分ぐらい歩いてくるのですが、ダラダラダラダラ歩いてくるのです。それで目がトロンとして、何でこんなとこ来たんやろって感じでね。それでうちの近くの竹藪、今の竹藪は本当にうっそうとしていますが、そういう竹藪の竹を切って、すぐ鋸をひいて竹のコップや皿を作ってもらえるのですが、本当に短時間で人って順応するのだなと思うぐらいに変わります。そして竹藪に入ってくるときに、もう意欲がわいてきますし、また、竹コ

ップを作ったり箸を作るのもものすごく嬉々として作るようになります。みんなで竹を切ったりすると、支えなければいけないのです。動いてはいけない。だから協力する気持ちもわいてくる。だんだんだんだん集中してくるものだから、お腹が減るのです。もう食べる食べる食べる。玄米正食で食べさせるのですが、最初は何かこれ？っていう感じになっていきますけれども、バクバク食ってしまって、いくら作っても足りないようになります。毎日が便秘みたいな子もいるのですが、うんこがもうすごく出るようになります。うちのトイレはボタンで、すぐに満員になってしまうのです。汲み取り屋さんに世話になっているんですけどもね。音を中心にしていますけれども、感覚を使えるような自然の中で生活をして、そして気力、活力、エネルギーを持って帰って、闘志のある学生になってもらいたい。今後の課題という、そのような姿で社会に出てもらえれば良いと、そのように感じます。

馬場：ありがとうございます。そういう形で若い人たちにそういった力を取り入れて生活してもらいたいと思いますね。昔の生活は、今より不便な生活であったかもしれませんが、生活の音に満ちた空間があり、生活と音が密着していたということから、前半のレクチャーコンサートを「昔の音世界」というテーマで組み立てられたのですね。

松本：そうですね。精神に与える面が、今の音と昔の音は違っていたところから、そういう古い時代の音の研究をしています。

馬場：さあどうでしょうか。濱野先生、どうぞ自由に。

濱野：ありがとうございます。とても楽しく聞かせてもらいました。最初に、このピューと笛が鳴りました。本当は元は別の材質なんでしょう、それを竹で作っておられる。本当は何だったんですか？あ、木なんですね。それがこの部屋でもピューっと聞こえてきまして、これはすごく印象的というか、音をすごく大切にしていると感じましたね。皆さんに共有できるような音をどうやって出すかということがあって、それを単に楽器を持ってならせばいいというも

のではなくて、人と共有する空間を作っていく、音が人と人をつないでいる空間作りにつながっているということですね。その空間をどんなふう構成していったらいいのかというのを非常に丁寧に示していただいて、非常に感心したというか、ああそういうことなのかなと思ったのです。

そしてそこに竹が入っているというのも面白いですね。竹の音の自然にすごく近い感じ、都会の中でこういう家の中で、そういうものがないところで、ビューッと鳴らすと、何か自然に包まれるような気がします。こういう全く人工的空間の中で、竹のもっているものの効果というか、非常に面白いなと思ってます。

安本：竹と木で作る楽器ですね。楽器作りに関して質問というか確認をさせていただきたいのですが、先ほどの学生も作っていましたが、私が竹藪にて竹を切ったり木を切ったりして楽器を作っても、たぶんおそらくうまくできないと思うのです。学生もそうですけれども、松本さんは、長い間自然の中で生活をされて、そして竹の気持ちとか木の気持ちとか性格も全て、それを会話をしながら感じ取っておられるだろうと思うのです。

そうすると、例えばいつそれを切ったらいいかというのは、今どうでしょうかねえとか、今切ってほしい、あと何日先に切ってほしいというように、竹や木と会話をしながら切り取られるだろうと思うのです。作る時も、自分が作っているということではなくて、竹とか木がこのように削ってほしい、このように切って作ってほしいという、そういう声を聞きながら作っておられるのではないかと思っているのですが、実際はどうかかなということをお聞きしたいと思います。

松本：そういう、すばらしい質問をされるのは、学校の先生にしておくのがもったいない(笑)。木こりか何かに…。実際そのとおりなのです。昔は山の声がするとよくいわれたみたいです。山に登りますと、風も何もないのに音がするのです。風があれば葉っぱが飛び散る音だとか、近くに沢があれば、その音が混ざるのでしょうけれども、そういうのが全くなくて、本当にシ

ーンとしたときに音がする。なぜ音がするのかといいますと、木も眠るのです。そして動植物のうごめきや、それから木も、おそらく水を吸い上げて、生命活動、光合成もしていますから、そこから音を発しているのだと思います。ましてや樹齢100年、200年の樹木となりますと、木の中心(ウロ)がぼろぼろになってきます。我々が楽器として、それから家具として家として使う木というのは、世代交代をするのであろう老木であるのは間違いではない。そのウロをみつけるためには、生息している木をたたくんですね、爪楊枝みたいな細い木を使って。中の芯が腐って空洞になったウロをそのようにして見出すのですが、その空洞の響きを聞いて、あ、これはもう切る時期だなという時に切るということ、昔の人は経験してきたらしい。

私などは、そういうやり方がなかなかできないのですけれども、今はチェーンソーなどでできて木を大量に伐採することになったことで、ウロの入った古い木をみつけることが困難になってきたので、なかなか昔の人のような経験をすることができません。でもできたら、そういうことを少しずつでも体験しながら作っていきなりたいなと思っていますし、今言われたような感じで、できるだけ木の声というか、本当は物理的にも検証していきたいのですが、そういった形でやっています。

永澤：何か最初からすごいお話が出てきているのですけれども(笑)。今のお話を伺っていて思ったのですけれども、木を切るときに、満月のときに切るとか、新月から満月までの何日目にか切るとか、地域によって割と決まっているところがあります。それは最近、月の暦に従って、木もバイオリズムがあるということがわかってきて、ヨーロッパの国では、新しく法律を作って、伝統的な知恵に従って、伐採の日を決める国も出てきています。あと、例えばチベット医学では、薬草を採るときに、満月の時にとるとか規制があるのです。そういうのはどうなんですかね、何か呼ばれる日は満月が多いとか、そういうことはないですか。そういう話をうかがいたいと思います。

松本：満月のときは、ほえたくなるのですけれ

ども（笑）。

永澤：それはそうですね。

松本：女性は月とほとんど調整しながら、出産にしてもそうでしょうし、木もそこはよく知らないですけども、だけど木もあるのではないかと思います。

永澤：人間の死と月の満ち欠けについてですが、野口整体の指導者で、柳田利昭先生という方が、統計的に調べていました。それによると、体の整っている人、楽に死ぬ人というのは、新月のところに死ぬというのです。時間帯も、干潮とか満潮とか、そういう時間帯で亡くなるということがある程度分かっています。モメントは逆かもしれません、人間が、さっきほえたくなるとおっしゃっていましたが、それと、あと木が切ってほしくないような時期がもしかしたらあるかなと思ったりするのですが。

松本：あると思いますよ。ですから、先ほどから馬場先生も言っていますように、現代社会は人工的なものであふれていまして、iPhoneに集中してしまうと、脳が活躍しなくなってしまうものがあるはずで、昔の、音をもものすごく必要として生きていたころと違い、今は逆に不必要だなど、嫌な音だ、これ切り離したい、みたいな形で生きているわけじゃないだろうかと思っています。

濱野：先ほどこれを始める前にしていた話ですが、今の話とつながると思うので、もう一度お聞きしたいと思うのですが、木で作られた楽器というのは、作られた土地の外に持っていくのではなくて、場所というものの、その土地で育った木、やはりその土地の木でないと、というのはあると思うのですが、その点もお話いただけませんかでしょうか。

松本：では楽器のことを話してよろしいですか（笑）。例えばヨーロッパにチェリストが留学しまして、練習してうまくなりました。当然古い楽器も、名器を手に入れたいと思い、イタリアで手に入れました。日本に帰ってきました。イタリアであんなすばらしい音が出ていたのに、日本に帰ってきたら出ません。1年たっても2年たっても。うちに調整に持ってきます。それは先ほどおっしゃられたように、アルプスの南ア

ルプスですね、サイプレスすなわち糸杉を使って作った楽器が、やっぱりその当地のものが一番鳴ります。それに匹敵したようなところだったら乾燥具合とか、日本は湿度が高いので、できれば日本の楽器は日本の木で作るのが一番理想的ではないかと思ひ、カテリーナではそうしています。地元のは、地元の木をなるべく使おうとしている。もうちょっと付け加えますと、例えばバイオリンなんかでも、裏板とか側板というのは、メープルという楓の木を使っています。日本で「楓」と呼ばれる木を使ったら、ヨーロッパのメープルとは違います。固いのです。ですから、日本だったら、それをトチノキに変えて、ヨーロッパのメープルの代わりに使います。

濱野：木にも土地の魂が宿っていて、伐採して、それを道具にしている、その魂のつながりみたいなものがあるところに私たちもつながっていて、そういう想像もしますよね。そういうのをもっと考えていくと、すごいと思います。

松本：今の話は、本当にそのとおりでと思います。リルケがこんな話をしています。ストラディバリウスを作る。ストラディバリウスは、ウッドランナー、森の木こりさんたちですね、しかも野草で薬を作っていて、その仕事のついでにこの楽器を作っていた。それがすばらしいということで評判になって、だんだん人気が出てきますと、今度は楽器でもうけてやろうという気になって、工場がいっぱいできました。そして木をいっぱい切って、たくさん楽器を作った。ストラディバリウスの生み出すバイオリンの音は、聖なる森の声を出して、もう一つの方の大量生産の楽器からは森が泣いている音がでていた。そういう話があります。

馬場：そうですね。今のお話は、使う木がその土地のもので、適材適所というか、そういうことなのですね。だから、たまたま公博さんは、中世のヨーロッパの楽器というものの製作を始められたのですけれども、何かそれを日本で生かしていこうという、そういうふうなことを考えられているのかと思いますが、中世のヨーロッパにこだわつつ、結局は日本の自然というか、そういったものにもこだわっている。その

つながりについてはいかがでしょうか。

松本：そうですね。僕は音楽大学出身なんです。音楽大学では、ドイツのだいたい19世紀ごろの音楽を教えるんですね。自分としては、日本で育って日本の童謡や民謡を聞いたりして育ったので、何となくしっくりこない。しかしそういう中で、だから邦楽に戻れるかと思ったら、そういうものでもなかったの、いろいろこう思い悩んだときに、ヨーロッパで19世紀の終わりごろから古いルネッサンスや中世の時代を、楽器の復興、復元をする運動が始まったことを知ったんですね。それは自然回帰への波ともいえます。それでアンサンブルをする人たちが増えたり、復元研究をする作家が増えてきていて、そういう情報がレコードに入ってきたりしてましたので、その音楽を聞いた瞬間に、もう、ああ、これだなと思ったんです。だんだん、ヨーロッパの中世やルネッサンスの音楽をやっているうちに、またアラブとか東方の影響を強く受けているのが分かって、アフリカの影響も相当受けています。それでどんどん音楽の通り具合がよくなった。自分の中です。今は、風土を見つめ直し、そこでの素材を活用しながら、日本生まれの古楽器を生み出しております。

永澤：聞いていて、今思ったのですけれども、リズムが、西洋近代の音楽と全然違って、やっぱり踊れる感じなわけですよね。かなり複雑な感じのリズムもあって、それで、あれはやっぱりインドとかアラブとかの影響なんだなと思ったのですけれども、楽器そのものはどうなのですか。音の出し方とかは、インドとかなり似ているものがあるように思いますが。

松本：打楽器は、そのままインドとかアラブ、ペルシャですね、そういうところのままですね。だから、古楽器、僕らが作っている中世の古楽器は、ほとんどもうアラブの楽器と同じだと思うんです。ちょっとヨーロッパ的には変わってますけどね。

安本：我々もそうですが、音に対する感性、これはやはりちょっと磨いた方がいいのかなとしたりするのです。例えばもう10年ぐらい前になるのですが、学生、美術を専攻していた学生に出会ったことがありまして、日によって、う

まく描ける日と描けない日があると言うのです。自分でもそれは分からない。1年ほどかかって、あれそうなんだと、やっと分かったというのです。風景を描いていまして、うまく描ける日は、音が聞こえてくる日だったというのです。要するに風景、山だとか川からいろんな音が聞こえてくる。うまく描けない日は、音が聞こえてこなかった日というのが分かったというのです。それを聞いて非常にびっくりもしましたし、教育者としては、それは非常にありがたい答えの一つだと思うのです。

それと同じように、私たちの音は、先ほど学生たちも言いましたけれども、聞きたい音を聞いている。聞きたくない音は聞かない。ですから車の音とか機械騒音とか飛行機の音というのは、もううるさいのは当たり前ですね。それはうるさいという先入観がありますよね。ところが、その人たちが、もちろんそれはなくすことはできませんので、少しでも心豊かに過ごそうと思えば、それをある程度許せる感性もないといけない。そうすると、虫の声とか、ちょろちょろとした小さな音が聞こえるような感性ですね。そうすると耳を澄ませないといけない。その音が聞こえるようになると、逆に車の騒音も、私も経験したことあるのですが、1点ですーっと1時間ほど聞いているのです。そうすると、今日演奏していただいたような音楽に聞こえてくることがあるのです。音の強さの違いもあるし、車間距離も違いますし、リズムも違う。そういうことを位置付けているのではないかと。ですから、やっぱり日ごろ、いい音に対しても耳を傾ける、そういうのが大事だと思います。

もう一つは、学生たちをキャンパスの中に放り出しましてですね、教室から。幾つ音の種類が見つかるかという課題を与えたときに、教室内では、最初20個ぐらいあるかなと答えるのです、ほとんどが。それを放り出しましてね、何でこんなことさせるんやと怒られますけれども、行ってきなさいという、だいたい100個集めてくるのです。それは、普段80個は聞いていないわけです。それを60～80個聞けるようになったということで、次の日からいろんな音が聞こえてくるのです。そうすると、耳の音に対する

スイッチが、騒音とか、そういう音だけではなく、いろいろな音が聞こえる幅の広いスイッチに切り替わったのではないかと思うのです。それによって、日ごろの生活が豊かになるということも感想で述べていただく。今日の学生たちもそうだと思うのですが、そういうことをこれから若い人たちだけではなく、私たちみたいな、年は若くないと思うのですが、そういう人たちにも必要かなと思って（笑）。

馬場：ありがとうございます。最近の若い者とはいうか、若い世代だけがそうかと思っていると、そうではなくて、年にかかわらず感性は作られているという、そんなことかなと思ったりしますが、そういうことを考えさせられる今日の演奏だったと思います。そうですね。普段から音のことを考えていたとか、演奏しているという方もいらっしゃると思いますので、フロアの方の中からも、何かご意見とか、松本公博さんにご質問とかあれば、よろしく願います。いらっしゃいましたら、どうぞ。

長根：先ほど演奏させていただいた者ですけども、今のお話すごく共感できました。音に対する感性がすごく鋭いということは、実は体が緩んでいるということと私はイコールじゃないかと思っています。体が緩んでいる。それはリラックスしていることにイコールになると私は思っていて、それで今のお話されていた音が20と思っていたものが100あると分かった途端に、スイッチが切り替わる。切り替わるということは、変に体がどこかストレスをかけ、またいろいろな不安、恐怖、心配、いろいろなことで体が緊張するというか、音というもの、耳から聞こえてくるものというところに感覚がそろったときに、ほどけていくと私は認識しています。

それで、私も気功、濱野先生の教室に通わせていただいているのですけれども（笑）、気功を最初に30分してから演奏を聞いていただくと、皆さん、音の聞こえ方がすごくよくなったと驚かれるのです。私はよくそういうことをして、最初にお客さまに早めに来てくださいと言っておいて、30分くらいリラックスするように、気功というか、リラクゼーション的に体を動かし

てゆっくりと首を回すとか、そういう簡単なことをしていくことによって、体が十分リラックスするのです。そうすると、音の感度がものすごくよいものになって、楽器を作っている仕事、作る仕事をされている方が来てくださったときには、今までの人生で2回目ですと言われました。こんなに音の感性が優れるというのは、今までで2回目。

だから、音の感覚を重視する。耳を澄ませた暮らしをしていた昔の方々というのは、たぶん変な気持ちはなくて、とてもリラックスしていて、だけど芯が通っているという体をしていただいているかとは私は思っているのです。そういった中で、今現在の音の状態、今日演奏していただいた時代の音の状態、その昔の音の暮らしというのは、とても違った暮らしをしていると思うのですけれども、昔の音にちょっと耳を澄ませることによって、またそういう感覚が開きやすいのではないかと思います。デジタル化された音と違って、丁寧にその時代に作られた楽器の音を聞くことによって、昔の音の感覚というのが開いていって、リラックスして穏やかに今の世を平和に過ごそうと思えるのかなと私は考えています。ありがとうございます。（拍手）

馬場：濱野先生はいかがですか。師匠の立場として、その気功との関わりなど。

濱野：今演奏を聞かせていただいたんですが、音を聞くのも大事なのですけれども、気功の練習を一緒にやっているときに、一応僕が号令かけてやっているんで、声をどう出すかという苦労をしているというか、人に号令をかけて、号令が命令にならずに一緒にできる声掛けとなって、それは自分の中で、まさにリラックスなのです。自分がリラックスして「あ〜」っていう感じの声が出せると、一緒にリラックスしていく感じになって、「いち、に、さん」という号令の声を、その感じの「いち、にい、さん」とやっていると「ああー」みたいになって、そういう自分の出す声が、声も自分の体ももっと深くつながっていると、一緒に気を共有する感じというのか、共通の感覚が生まれるというのかなというのはずいぶん感じますね。

馬場：話がとうとう健康ということに関わって

きましたけれども、ほかにどなたか、こんなことを思ったとかございませんでしょうか。どうぞ。

松本：些細なことでも結構ですから。

女性A：素晴らしい演奏ありがとうございました。古楽が好きで、よく聞くのですけれども、リラックスするだけではなくて、特にドリア調の聖母マリア賛歌を歌っていて、何か駆り立てられるような大事なものの、そんな感じがしたのがすごく印象的だったのですけれども、それがどういう曲なのか、どういうつもりで演奏されているのか。それから聖母マリア賛歌というのは、今の教会では、ちょっと流れないかもしれませんが、若干……。

松本：たぶん巡礼歌みたいなものです。御詠歌みたい。みんなで歩きながら、そして歌う、あれは楽器だけでなく歌が付いて、だから鐘でも鳴らしながら、「アーラーフェーフー」、こういうふうな感じで旅をして泣きながら、巡礼しながら歌ったものです。

女性A：ありがとうございます。

馬場：はい。それではほかの方。

女性B：曲を聴いているときに、それぞれ中世の庭に思いをはせて、本当に楽器を持って長靴のつま先上げて、踊りながら歩いて、ついでいきたいような感じを受けたのです。そのときはもう恥ずかしいとかそういうのは一切なしに、きっとその時代だと、素直に体が反応して行けたのではないかなと思いました。本当に何回か聞かせていただいたのですけれども、今日は特にそういう気持ちになりました。ありがとうございました。

松本：たぶん当時だったら、連れていかれていたかもしれませんね（笑）。最初は何にも知らなくて、少々どきどきしながら、お賽銭箱をもって。

馬場：では、もう一方。

男性：城陽に住んでおりますけれども、あまり高尚な話ではなく、ゲスな話で申し訳ないのですけれども、家の近くに竹林があるのですが、年取ってきますと、何ぼつらいなあとあって、パッと下を向いたら、竹林があって、腐りかけの竹を切ったものが、ほかしてあるんですね。それを拾ってきますと、自分で楽器を作ったのです。家で、部屋の中で作って、ところがこれ

をやって、少し文部省の昔の歌ですね。「ふるさと」とか、そんなのが吹けるようになったのですよ。それをやりますと、僕74になるのですけれども、肺活量がものすごく出てきたのです。それで健康になったのです。今まで風邪や何やと、あまり機会がなかったのですけれども、最近ものすごく健康になった。「あんた前にスポーツ何かやってたのかね？」と聞かれたりもします。僕思うのは、この年になって、何もやらないよりは、その腐りかけた竹でも（笑）、それで、自分のものにして、自分の音色にする。これを若い方に、僕はちょっと文科省のある団体のいろいろやっているのですけれども、そんな中で、若い人が、会をやると全然寄ってきてくれないのです。なものですから、そんなので、ちょっと若い人を活性化できたらいいのかなと思っております。高尚な話でなくて申し訳ないのですけれども、自分で楽器を作る、楽しむ。何ももうこの年になったら、何も楽しみはなくなってきたので、ですから、そんな形で、若い人も一緒にやっていけたらいいかなと。これから大学生の方に、またキャンプするとか、どこか、よその国に行かはったりというようなことがあれば、何かお願いしようと思っています。若い人のエネルギーってやつを、またいっぱいいただいてね（笑）、頑張ってくださいと思います。えらいすんません。（拍手）

松本：ご年配の方は違いますね（笑）。エネルギーが、ご努力もね。

馬場：どうもありがとうございました。素晴らしい締め言葉いただきました（笑）。是非年齢に関係なく、そういった数多くの取り組みをしていきたいということで、竹でみんなで楽器を作りましょうということでした。実は昨日、竹楽器トガトンづくりワークショップを文教大でやったのですが、この中でも参加された方が何人かいらっしゃるのですけれども、来年は竹林で竹を切って、その場でトガトンを作って、そして竹林で伐採したものも燃やして、そこで豚汁でも作りながら、トガトンパーティーでもやろうかと、そんなことを考えていますので、そんな企画もあるということで、今日のレクチャーコンサートと、シンポジウムを終わりにさ

せていただきたいと思います。

それでは、どうも長い間ありがとうございました。
(拍手)

(終了)

このシンポジウムでのディスカッションでは、音に関して重要な点がいくつか指摘された。以下、そのポイントをまとめておきたい。

1. 昔の生活は、今より不便な生活であったかもしれないが、生活の音に満ちた空間があり、生活と音が密着しており、精神に与える影響が、今の音と昔の音では違っていたと考えられる。
2. 自然素材の手作り楽器の音は、人と共有する空間、音が人と人をつないでいる空間作りにつながっている。また、自然素材の楽器づくりは、木や竹と会話しながら伐採するが、その際、竹の気持ちとか木の気持ちとか性格も全て、会話を通じて感じとる。木を切る時期は、木のバイオリズム、自然のリズムと密接にむすびついている。そして、楽器はその土地の木を用いることが大切である。土地の魂が楽器にあらわれ、それが人につながっていく。
3. 虫の声など小さな音が聞こえるような感性を養うことが、心豊かに過ごすことにつながる。音に対する許容力によって、車の騒音も、音楽に聞こえてくることがある。耳の音に対するスイッチが、いろいろな音が聞こえる幅の広いスイッチに切り替わる。こうした感性は世代を越えて必要である。音に対する感性の鋭さは、体が緩む、リラックスにつながる。不安、恐怖などでおこる緊張が、音に対する感性によってほどけていく。
4. 昔の音の暮らしから生まれたような音に耳を澄ますことで、そういう感覚が開きやすくなる。デジタル化された音と異なる丁寧に作られた楽器の音を聞く事でリラックスして穏やかに過ごすと思える。
5. 年に関わらず、竹で楽器をつくって自分の音を出す事は健康増進にも役立つ。



現代社会はストレス社会ともいわれ、そうした社会自体を見直す必要があるのはいうまでもない。しかしながら、全ての人が、カテリーナ古楽器研究所で試みられているような生活を送ることができるわけではない。今回のような試みは、参加者の方々に少しでも、こうした音に対する感覚を取り戻すことの重要性を思い出し、考えていただき、できる範囲で、より豊かな感性で生活を送るためのきっかけとなったのではないかと考えている。

(文責：馬場雄司)

昔の音世界

CATHERINA Early Musical
Instruments Work Shop

カテリナ古楽器研究所
ディザイン

昔の音楽を体感して頂き、カテリナ古楽器研究所で生み出した古楽器の個性豊かな音色に耳を傾けながら昔の音世界を想像してみてください。

プログラム

ホランド I 五月の歌 Kalenda Maija



カステール王国の国王アルフォンソ10世(1221-1284)が編み出した400編の曲の中から抜粋した7曲と、ルネサンス期に人気のあった舞曲から2曲。これらの曲は、戦国時代に日本にも伝わり、この界隈は鳴り響いたとすれば、最新の音楽だともいえるでしょう。

I 聖母マリアに

II その犯した罪咎に

III 舞曲 エカセー

IV ドリア調 聖母マリア讃歌

V 聖母マリアは盗人を許し給わねば Den sofre

VI キリシの御母に

VII 手だて尽くし

VIII 舞曲 トルリスオン

IX まことの信仰をもって

使用楽器

管楽器； フリューゲル、サクソフォーン、竹アルトホルダー

弦楽器； フルート、ヴァイオリン、ウクレレ、リュート、ギター

打楽器； タンバリン、フーゴ、カク、バカ、各種鈴

キリスト教とイスラム教が融合して栄えたムスリムといわれる文化の中で生み出された音楽的3曲。

XI Duen a Omagen

XII Sana para la fiesta dela circuncision

XIII 楽い夜

MEMO

<http://catherina.1992.blogspot.jp/>